運動部活動における活動意識に関する研究
—中学校運動部活動参加者を対象として—

澤口　裕太　　関岡　康雄

キーワード：運動部活動，部活動の在り方，指導教員

A study on students' consciousness of participating in sport club activities in junior high school

Yuta Sawaguchi　　Yasuo Sekioka

Abstract

This study was intended to survey students' expectations for and awareness of participating in sports clubs in their schools, and, also, concepts and tasks teachers have on sports clubs while they supervise those in schools.

Five hundred students were arbitrary chosen from two junior high schools in Fukushima city and 50 teachers also selected from the same schools as subjects. Questionnaire was directly distributed to and collected from the subjects by the investigator, and 497 responses from students and 29 from teachers were obtained.

Fifty-five percent of the students aimed at enjoyment through winning, 22% was for winning while enjoying, and 15% aimed at winning by any cost. About conceived merits of club activities, 74% of students indicated fitness improvement, almost 50% enjoyment in sports, and 37% making friends and skill development. Problems indicated by the students were short of workout time(23.3%), narrow practice space(39.0%), incompetence of teachers(15.1%), and easiness of drilling(13.3%). Many teachers complained about too busy to teach and confessed their incompetence in teaching. No teacher claimed for winning at any cost. Teachers' conceived merits of club activity were almost similar to those indicated by the students though they also put emphasis on mental aspects such as will-power, responsibility, and cooperation. Generally, there found some discrepancies in their conceptualizations of sport clubs between students and teachers.

Key Words: school sport club　junior high school　student participation
teaching and coaching

Ⅰ．目的

今日の我が国において，中学生が「好きなスポーツを継続して楽しみたい」と考えた場合，学校における運動部活動に所属することが一番の近道である．しかし，中学校では少子化に伴う生徒数の減少（図１）や，教員の高齢化（図２）が深刻化するなど，中学校運動部活動をめぐる状況は極めて厳しい．また，多様化が求められる現在の中学校教育の中で，部活動に課せられる役割はよ

り大きくなっているといえよう.

中学生・高校生のスポーツに関する調査研究協力者会議が平成 8 年に実施した「中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査」によると,「運動部活動は楽しいか」という問いに対して調査対象の中学生の 83.4%が「楽しい(とても楽しい, どちらかというと楽しい)」と答えた. しかし,「苦しい」と答えた生徒は 1 年生が 12.2%, 2 年生が 17.5%, 3 年生が 20.6%と, 学年が上になるにしたがって増えていく傾向を示している. 本来ならば, 最高学年となり, 自分たちが中心となって活動に取り組むことが出来る三年生が「楽しい」との生徒が答える事が予想されるはずだが, この結果から必ずしもそうではないということが分かる.

3 年間という限られた時間の中で, 中学生にとって運動部活動が占めるウェイトは大きい. 中でも競技会を目指して練習を重ねる運動部活動では, 限られた大会出場枠, 限られた登録選手枠, 限られたレギュラー枠を目指して熱中する生徒が多い. その反面, 勝利至上主義を掲げる指導者について行くことが出来ず, 運動部活動そのものに不満を感じている生徒が多いのも事実であろう.

学校教育そのものの在り方が変化する今日, 今後中学校における運動部活動がどういった方向性を持って進んで行かなければならないかは重要な課題であり, わが国においてはスポーツクラブよりも, 学校運動部が主流であることを考慮した上で, 発展的に運動部活動を変えていくことがひとつの手がかりとなるはずである.

本研究では, 中学校の運動部活動に所属する生徒を対象として, 生徒達が運動部活動にどのような期待を持って入部しているのか, 運動部の活動に対して, 現在どのような意識を持って参加しているのかを明らかにし, 併せて「コーチング」という観点から, 指導者らが, 運動部活動の指導についてどのような認識と課題を持っているのかなどについて明らかにすることを目的としている. また, 今後の中学校運動部の望ましい在り方を考える基礎的資料を得ることも目的とする.

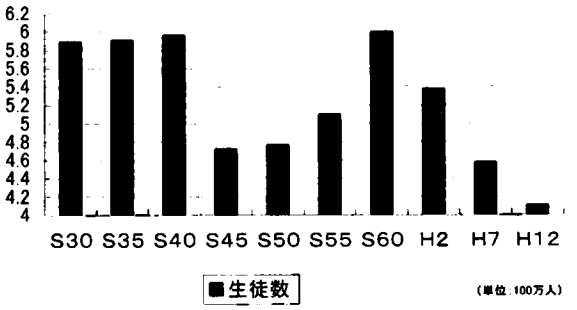


図 1　中学校の生徒数の変遷

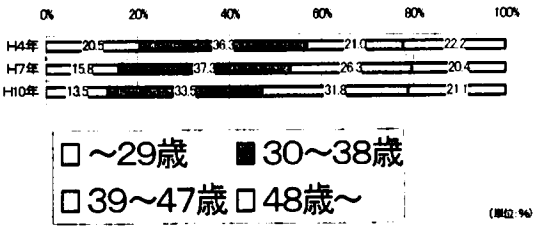


図 2　中学校教員の年齢構成
(参考：文部省「学校教員統計調査」)

II. 先行研究

加賀屋らは, 平成 8 年に行った「中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査」(以下, 平成 8 年調査) において, 運動部活動の現状をめぐる課題として, 次のようなことについて指摘している.

① 活動量 (部活動を行っている時間) の問題

平成 8 年調査の結果によると, 中学生の 26.0%が週 7 日活動しており, 運動部活動の問題点や悩み, 不満として運動部における活動時間の多さを指摘する者が 20.0%を超えた.

② 顧問教員の指導力の問題

平成 8 年調査の結果によると, 顧問の指導上の悩みとしては,「校務が忙しくて思うように指導できない」という事柄に続いて,「自分の専門的指導力の不足」と答えた者が多かった (40.0%).

競技の経験があまりない教員が, 顧問に就任する場合があること自体は当然ありえることであるが, 部の顧問教員が指導力を向上させ, 生徒たちのスポーツニーズにより応えて行くことも望まれているところである.

③ 部員数や顧問教員数の減少, 顧問教員の高齢化の問題

中学校では, 昭和 61 年をピークに生徒数が大幅に減少しており, それに伴い教員数も大幅に減少している. 学校数がほぼ横ばいであることを考えると, 1 校あたりの生徒数, 教員数が減っていることになる.

このような生徒数と教員数の減少は, 運動部の休部や廃部につながるケースが多く, (財) 日本中学校体育連盟の加盟運動部数は平成 3 年, 平成 8 年の比較で約 5,000 部も減少している.

④ 部活動への加入義務付けの問題

第 15 期中央教育審議会第 1 次答申では,「学校が全ての子供に対して部活動への参加を義務づけ, 画一的に活動を強制したり, それぞれの部において, 勝利至上主義

的な考え方から休日もほとんどなく長時間にわたる活動を子どもたちに強制するような一部の在り方は改善を図っていく必要がある」旨指摘されており，保健体育審議会答申も，「部活動への参加が強制にわたることのないよう運営すべきである」と指摘している．また，これらを踏まえ今後の運動部活動の展開に当たって，次のような視点が基本となると述べている．

・生徒の個性の尊重と柔軟な運営
・生徒の生活バランスの確保
・開かれた運動部活動

また宮内は，中学校・高等学校時代に運動部活動を経験し，それを肯定的に評価していると思われる大学生を調査し，生徒の立場からの「望ましい学校運動部」の考察を行った．

運動部活動においては「友情を育み，充足感」を得ることが大切となる．こうしたことから，中学校運動部は「部員同士仲良くし，友情を育み，体力とともに忍耐力や自信を持つようになるため，ある程度上下関係やきまりなどに，指導者の指導力を求められる」ものが望ましいと述べている．

Ⅲ．研究の方法

1．研究対象

調査の対象は福島市内の中学校２校である．

運動部活動に所属している１，２年生のうち，500 名（H中学校 200 名，S中学校 300 名）を作為的に抽出し，調査を行った．

また，運動部活動を指導している指導教員 50 名（H中学校 20 名，S中学校 30 名）にも同様の調査を依頼した．

生徒の回収総数は 497 名で，有効回答数は 490 件名（男子：291 名，女子：199 名）であった．

指導教員の回収総数は 29 名で，有効回答数は 29 名であった．

2．調査方法

質問紙調査法（運動部に所属する生徒への調査と指導教員に対する調査の２調査を実施）を用いた．

3．調査内容

1）運動部に所属する生徒への調査内容（附記参照）
①運動部活動の現状に関する調査（10 項目）
②運動部活動の今後の在り方に関する調査（６項目）

2）運動部活動を指導する教員への調査内容（附記参照）
①運動部指導の現状に関する調査（11 項目）
②運動部活動の今後の在り方に関する調査（９項目）

4．調査期間

調査期間は平成 14 年 11 月 1 日から平成 14 年 12 月 15 日までであった．

Ⅳ．結果・考察

1．生徒に対する調査結果の考察

1）部活動の目的

「あなたは運動部の在り方はどうあるべきだと思いますか」という問いに対して，「厳しく徹底して勝つことを目指す」という回答は 86 名（17.6%）であった．また逆に，「勝たなくてもみんなで楽しく活動すればよい」という回答が 26 名（5.3%）で，「競技者志向」あるいは「楽しみ志向」への偏りが少ない結果となった．（図４）

また，「部活動を通してどんな事を得ると思いますか」という質問には，「体力が高まる」（361 名，73.9%）や「スポーツの楽しさ」（244 名，49.8%），「友達」（185 名，37.6%），「技術が向上」（181 名，36.9%）が高い回答数を示した．これらは，いずれも自分にとっての「楽しさ」や「目に見えてプラスとなっているもの」であり，それとは逆に「協調性」（12 名 2.4%），「生活が充実」（25 名，5.1%）などは低い回答数だった．

これらを男女別で見てみると，「体力が高まる」は男女共に非常に高い回答率を示した（男子：73.5%，女子：74.4%）が，男子では「技術が向上」（43.0%）が多く，これはスポーツ種目に直接関わる回答であり，「そのスポーツが上手くなりたい」という願望を持った生徒が男子には特に多いことが伺える．それとは逆に，女子では「スポーツの楽しさ」（55.3%）や「友達」（47.7%）などが特に多く，「友達」と答えた生徒は男子の数を上回った．宮内は，部活動から得られるものは，「忍耐力」「友情」「体力」であるが，男子では「体力」「技術記録」等のスポーツ自体と自分自身の関係から，女子では「友情」等のスポーツをめぐっての他者との関係から評価する傾向にあるとしている．本研究における調査結果からも同様のことが言える．

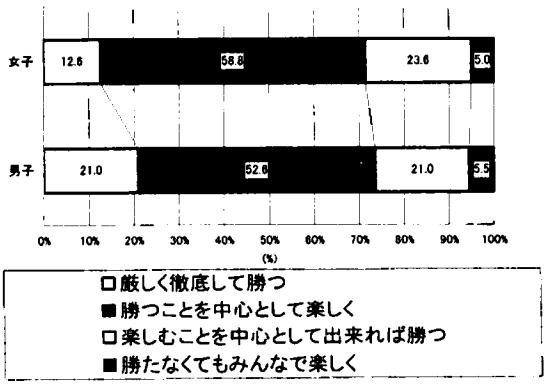


図３　「運動部はどうあるべきか」

表１　部活動を通してどんな事を得るか

①回答数が多かった項目（単位：%）

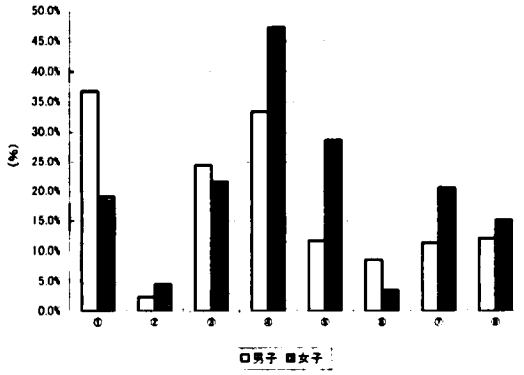
	全　体	男子	女子
体力が高まる	74.0	73.5	74.4
スポーツの楽しさ	49.9	46.0	55.3
友達	37.0	30.6	47.7
技術が向上	37.0	43.0	28.1

②回答数が少なかった項目（単位：%）

	全　体	男子	女子
競技者として活躍	6.5	6.2	7.0
生活が充実	5.1	5.5	4.5
協調性	2.5	3.1	1.5

2）生徒が部活動の問題と感じているところ

「部活動の問題点は何だと思いますか」（複数回答可）という問いには，「特になし」と答えた生徒が 145 名（29.7%）と多かったものの，「活動時間が少なすぎる」（114 名，23.3%），「活動場所がせまい」（190 名，39.0%），「練習内容が易しすぎる」（66 名 13.3%）など練習環境や練習内容に関する問題点を指摘する声が多く，意欲的に部活動に取り組みたいと伺える意見が多かった．しかし，「指導者が張り切りすぎ」（31 名，6.5%）や「指導者の指導力不足」（74 名，15.1%）などの指導者に対する不満も多い結果となった．（図３）　また，「活動場所がせまい」や「生徒同士の人間関係」に関しては，女子生徒が特に高い値を示している．



①特になし
②活動時間が多い
③活動時間が少ない
④活動場所がせまい
⑤生徒同士の人間関係
⑥指導者が張り切りすぎ
⑦指導者の能力不足
⑧練習内容が易しい

図４　部活動の問題点

「部活動をしていての悩み」（複数回答可）においても，同様の問題が浮き彫りになった．（表２）「休日が少ない」「遊んだり勉強したりする時間がない」「活動場所がせまい」「思うほどうまくならない」「部員同士の人間関係」「指導者が十分に指導してくれない」などの項目について，女子が高い回答率を示した．女子生徒は男子生徒以上に部活動に関する悩みを多く抱えていることが明らかとなった．これらは，運動部活動に求めるものやスポーツ評価に関する男女の大きな違いを表している．

表２　部活動をしていての悩み（単位：%）

	全　体	男子	女子
①特になし	25.2	30.6	17.1
②疲れがたまる	24.1	24.4	23.6
③休日が少ない	12.7	11.7	14.1
④遊んだり勉強したりする時間がない	19.2	18.9	19.6
⑦練習時間が短すぎる	15.3	16.2	14.1
⑧活動場所がせまい	23.1	19.6	28.1
⑨思うほどうまくならない	18.2	14.8	23.1
⑩部員同士の人間関係	14.3	8.6	22.6
⑪指導者が十分に指導してくれない	13.3	8.2	20.6

3）部活動の必要性

「部活動は将来のために役立つと思いますか」という質問では，「大いに役立つ」（98 名，20.0%），「ある程度役立つ」（209 名 42.7%）と半数以上の生徒が部活動は自分にとってプラスになるという考えを示している．（図５）

また，「中学校生活の中で部活動は必要だと思いますか」という問いには，「大いに必要」と答えた生徒が 290 名（59.2%）と最も多く，次いである程度必要が 151 名（30.8%）となり，ほとんどの生徒が「部活動は必要」という考えを示した．

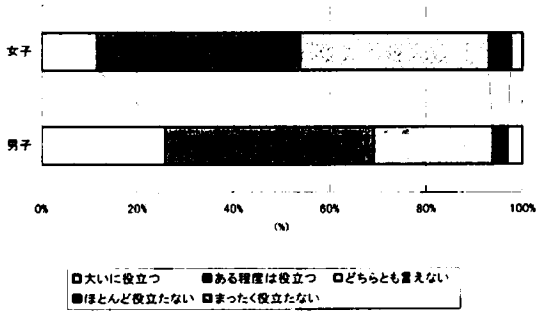


図５　部活動は将来のために役立つか

4）練習日数

「部活動での悩み」において，「休日が少なすぎる」(61名）や「遊んだり勉強したりする時間がない」（94 名）など練習時間に対する不満が多く，「土曜日と日曜日の部活動についてどう思うか」という問いでは，「土曜日も日曜日も休みがよい」と答えた生徒が 124 名に上った．特に男子は「1 週間の練習日数」でも「5 日」という意見が多く（128 名，44.0%），また「土曜日と日曜日の部活動について」という質問にも「土曜日も日曜日も休みがよい」という回答が女子に比べて男子の方が多い結果となった．

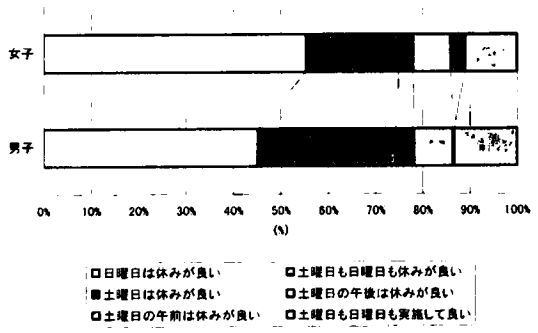


図６土曜日と日曜日の部活動の実施について

2．指導教　員に対する調査結果の考察

1）問題点

「運動部指導活動での問題点」の質問では「活動場所がせまい」（17 名），「指導者の指導力の不足」（12 名），「活動時間が少なすぎる」（９名）が上位を占めた．「運動部指導における悩み」では，「校務が忙しくて思うように指導できない」（22 名）や「自分の専門的指導力の不足」（19 名）が特に多く，主に指導教員自身の問題点が大半を占めるかたちとなった．

2）部活動を通して得ること

「部活動を通してどんなことを得るか」という質問では，生徒と同様に「体力が高まる」「スポーツの楽しさ」「技術が向上」などが高い値を示したが，「精神力や責任感」や「生活が充実」「協調性」なども多く，精神面の成長を目的として部活動を行っている指導教員側の考えが見て取れた．

3）運動部の在り方

「指導している部の目標」という質問では，「厳しく徹底して勝つことを目指す」と答えた指導教員は一人もいなかった．また，「運動部はどうあるべきか」という問いにも「厳しく徹底して勝つことを目指すべきである」と答えたものが一人しかおらず，指導教員側も「勝利至上主義」の考えを持っていない事が分かった．

3．生徒と指導教員の意識格差

本研究における「中学校の運動部活動に関する意識調査」の結果の中で，生徒と指導教員の違いが特に顕著だったものを図７－１から図７－５に示した．

図７－１と図７－３を見ると分かるように，指導教員側の考えと生徒の指導の受け止め方にかなり差が表れた．「所属（指導）している部の目標」では，「厳しく徹底して勝つことを目指している」と答えた生徒が 22.2%にも上ったにも関わらず，指導教員では回答者は一人も存在しなかった．また，「あなたたち（生徒たち）の意見は反映されていますか」という質問では，「反映されている」（よく反映されている，ある程度反映されているのいずれか）と答えた生徒は 29.8%にとどまったが，指導教員では 58.7%と倍以上の結果となった．以上の結果や，図７－１から図７－５の結果を総じて見てみると，ひとつの共通点が見えてくる．それが「生徒と指導教員の意識の違い」である．

本研究の「部活動指導上の問題点」「運動部活動指導上の悩み」で明らかになったように，中学校の教員は公務の問題や専門的な指導力の不足の問題など，幾つもの問題を抱えている．また，先に述べた第 15 次中教審第 1 次答申で危惧されていたような，勝利至上主義的な考え方についての問題は明らかにならなかったが，本研究で明らかとなった上記の問題点が要因となって，生徒と指導教員の意識格差が生じていると考えられる．

以上の結果を踏まえ「今後の課題と取り組み」を述べていきたい．

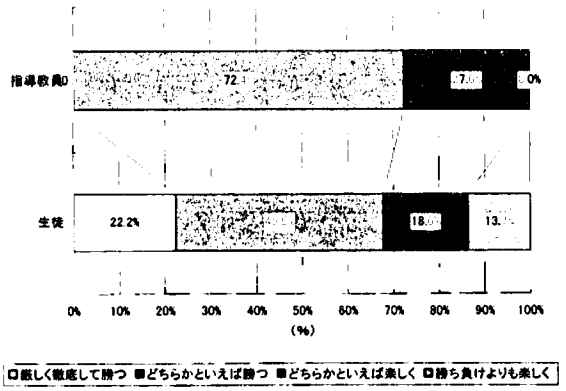


図７－１　所属している部の目標は何だと思いますか

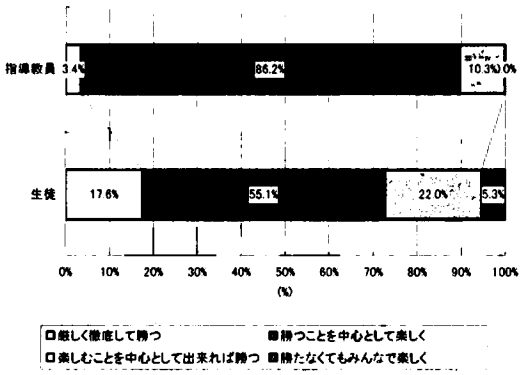


図７－２　運動部の在り方はどうあるべきだと思いますか

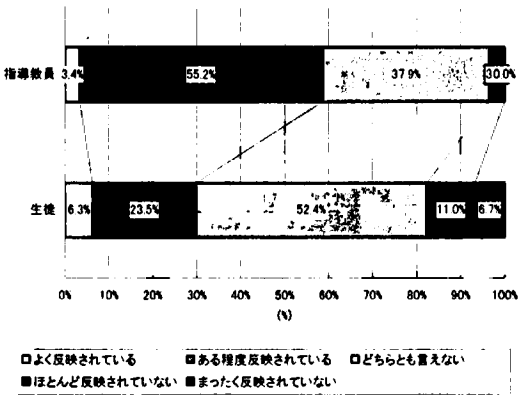


図７－３　練習や競技会で生徒たちの意見は反映されているか

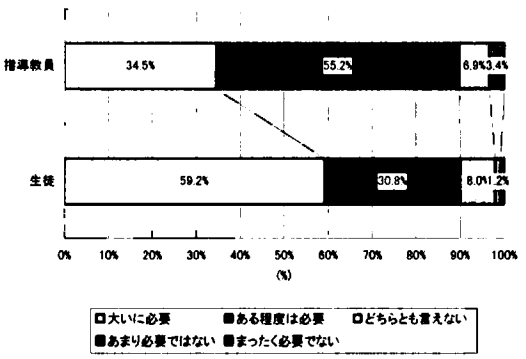


図７－４　部活動は必要か

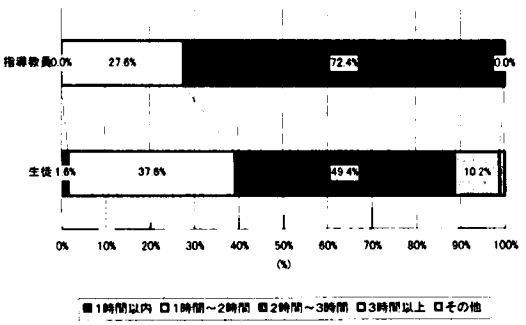


図７－５　１日の練習時間はどれくらいがよいか

5　結　論

本研究における「中学校の運動部活動に関する意識調査」では，生徒の男女間，そして生徒と指導教員の間に部活動に対する意識の違いを読み取ることが出来た．それぞれの特徴を表すと次のようになる．

①生徒（男子）

運動部活動に対して，意欲的に取り組む生徒が非常に多く，その目的も「体力を伸ばしたい」「技術の向上」「スポーツの楽しさ」などを多く求める生徒が多く，少ない日数，時間の中で合理的に強くなる（勝てる）方法を考えているようである．しかし，「協調性」や「精神力」「責任感」を軽視する傾向があり，精神的なもろさも伺える調査結果となった．

②生徒（女子）

「勝ちたい」という気持ちはあるが，どちらかと言えば「楽しく」活動を行いたいという者が多い．部活動の目的では「友達を得る」「スポーツを楽しむ」を半数以上の者が選び，逆に「部活動での悩み」では，「人間関係」が多く，人との関わり合いが非常に重要なウェイトを占めていることが分かった．しかし，男子と同様に「勝利至上主義」の考えを持つと思われる者も少なくなく，「勝利志向」と「楽しみ志向」の生徒の共存が鍵となってくるであろう．

③指導教員

先に述べた勝利至上主義を掲げたような指導教員は少なく，「楽しさ」を取り入れた運動部活動を目指して指導している者が多いようである．部活動の問題点では，「自分の経験不足」や「公務の忙しさ」を問題や悩みとして挙げる者が多く，生徒の悩みにおいても，指導教員の意欲不足ととれる意見が多数あったように，満足に指導の場に足を運べない（運ばない）状況にあるようである．指導教員の中には，部活動に関して現状程度の活動をして行ければと考えている者も多く見て取れ，部活動をより良いものにする為には，指導教員の意識を変化させて行く必要があるかもしれない．

以上のような結果をまとめると，指導教員（中学校の教員）の大部分が公務の忙しさ，自分の専門的指導力の不足によって「運動部活動に顔を出す」という行為自体がなかなか出来ない状況にあると言える．また，図２にあるような指導教員の年齢が高くなるにつれて，校務がより忙しくなることなどによって「意欲をもって部活動に取り組む」教員が少なくなっているのではないだろうか．これらは生徒の望む「専門的知識を持ち，意欲を持って部活動に取り組んでくれる指導者」とは合致しない．

「勝利至上主義」と「熱心な指導」の境界線が曖昧であるが，熱心な指導者が減って行けば，生徒側の不満もますます増え続けていくであろう．生徒にとって，指導教員が活動に参加しない運動部活動は，決して満足のいくものではない．それらの状況を打破するために，生徒側よりも指導教員（学校）側が意識を向上させて運動部活動に取り組むべきである．今後なるべく多くの生徒，指導教員が運動部活動に意欲的に参加することができるようにするには，部活動を介して生徒と指導教員がなるべく多くの時間を共有し，お互いの共通理解を図ることがこれまでに述べた課題を解決する手立てとるであろう．本研究では，以上を踏まえ，運動部の指導において今後，次のような工夫が行われることが求められると考える．

①生徒の意見を積極的に取り入れた指導

一般的に，中学校の部活動では，指導教員が部活経営に関するほとんどのことを執り行うことが多い．その中で，練習方法を話し合う機会を設け，練習計画を立案させたりすることで，部員の参加意識を高めることが期待できる．

②量より質を目指した活動を目指す

1日の中学校生活の中で，生徒が部活動に集中できる時間は限られている．その限られた時間を有効に活用するためにも，練習内容は「量」より「質」を重視したものにすることが有意であろう．練習計画を立てるにあたっては，勉強会を開催したり，積極的に意見交換を交わすことが望まれる．

③全員が活躍できる部活動を目指す

試合に出場するだけではなく，生徒それぞれに役割を与えることにより，参加意識を高めることにつながる．適切な支援をしつつ，可能な限りで生徒に部活動の仕事を任せていくことも生徒の育成に大きく貢献されるものと考える．

④外部指導者制度の導入

すでに導入されているこの制度であるが，これまでの生徒のためのコーチとしてだけではなく，指導教員の質を向上させるという意味合いを強く含めるべきであると考える．

⑤複数校合同運動部活動

「勝つための合同運動部」という概念は持たない．複数校が集まることによって指導者同士の技術や情報の交流が盛んに行われることが望まれる．また，生徒のスポーツニーズに応えることが期待される．

⑥地域スポーツクラブとの連携

サッカーなど，一部のスポーツではこのスポーツクラブが盛んに活動を行っており，日本のスポーツレベル向上の一役を担っている．欧米型といわれるこのスポーツクラブと学校が連携することにより，生徒のスポーツニーズに応え，また，競技力向上を期待することが出来る．

日本におけるスポーツは明治の初期に外国から移入され，高等師範学校などを中心に学校教育の中で展開されてきた．すなわち，スポーツの基盤が学校の運動部にあり，またその卒業生らが一部の企業の中でスポーツを継続してきた．本研究で明らかとなったような問題を含め，近年日本の競技スポーツを支えてきた基盤が崩れてきている．その中で，これまで以上の活動をすることは非常に難しいことであるが，運動部活動も教育の一環であることを考えると，指導教員に求められるものがいかに大きなものであるかが伺い知ることができる．今後，生徒と指導教員が共に意欲的な活動を展開することができるよう，各中学校における指導教員の方々の更なる努力に期待したい．

文献

青木邦男（1989），高校運動部員の部活継続と退部に影響する要因，体育学研究

中央教育審議会（1996），第15期第1次答申「21世紀を展望した教育の在り方

福島県中体連研究調査部（1998），部活動に関する諸調査，中体連回報

加賀屋ら（1997），運動部活動の在り方に関する調査研究報告，中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究 協力者会議

丸山ら（1994），現代生活とスポーツ，中央法規出版

宮内孝知（1997），中学校・高等学校運動部の「望ましさ」に関する研究（2）～スポーツ科学を専攻する大学生の調査から～，体育科学

宮脇勝弘（1997），週5日制にかかわる運動部活動のあり方，日本財団事業成果ライブラリー

文部省（1999），みんなでつくる運動部活動―あなたの部に生かして見ませんか―，東洋館出版社

落合優（1996），大学生における過去の運動部活動と現在のスポーツ参加状況との関連について，体育科学

高橋京子（1994），青少年のスポーツ参加に関する研究－第1報－，平成5年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告